

はみだし人間の 系譜



杉本苑子

中公文庫



中公文庫

はみだし人間^{にんげん}の系譜^{けいふ}

1996年1月5日印刷

1996年1月18日発行

定価はカバーに表示してあります。

著者 ^{すぎもと その こ} 杉本苑子

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA,INC. / Sonoko Sugimoto

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202509-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

はみだし人間の系譜

杉本 苑子

世界文庫

財団法人日本科学協会



中央公論社

目次

火事だ火事だ	9
桃ぐるい縞ぐるい	15
彼岸の茶の子	21
二人の小萬	27
神さまの正体	33
三人寄れば……	39
醜女は心の美人	45
牛ボサツ馬ボサツ	51
お医者さま二題	57
見られる女	63
鯉山の由来	69
蜘蛛のつくだ煮	75

蛩が鳴いた

宿を貸すぞよ

火事場の預かりもの

ヒゲ爺さまの涙

ハンパでない猪之助

ありがとさん

似たもの親子

水に魅せられた男

猫も顔負けだニャア

それぞれの死

トラベル虎の巻

歌売り渡世

天衣は無縫なり

表の顔と裏の顔

胃ぶくろは一つ

如来さまか妖怪か

書き直しはまっぴら

ヨウトホエルの末路

暑気払い豪勢くらべ

福ねずみの妙技

別件逮捕の島流し

茶を召しませや

念仏の質入れ

キツネのコン乱

市川団十郎の死

財テク武士道

蕉門の変り種

鬼ババものがたり

見よや女の心意気
 柿の実ひとつの命
 踊るヘンテコリン
 先生、大いに笑う
 木戸銭ご免の良助さん
 人づきあいは苦手
 かみさんパワーの爆発
 経営合理化の神サマ
 釜と松の木
 坊主頭は蚊のえじき
 集団奇行が大はやり

311 305 299 293 287 281 275 269 263 257 251

はみだし人間の系譜

火事だ火事だ

「なんのなにがし、三十年間ブランデーを注いできた男。彼が誇りをもって注ぐのは、ヘネシー」という広告を目にするたびに、私は唖る。客の美男美女に感心したわけではない。高級なお酒を羨んだわけでもない。「なんのなにがし」なるヘッド・バーマンが、三十年間うまずたゆまず、ブランデーを注ぎつづけたというその忍耐力に脱帽するのである。

「三十年が何だ。おれなんぞ四十年間、天ぶらの揚げ通しだ」と、おっしゃる方がいるかもしれない。「じいさんの、そのまたじいさんの代から、うなぎ捕り一筋でやってきた」とおっしゃる方もいるだろう。どちらにも、私は脱帽する。

*

私が小説を書くのは、どんなに下手でも変てこな作品でも、ともあれそれが、世界中に一つしかないからである。二十年三十年つづけて来られたのは、毎回ちがうものを創り出

すという「変化」に、支えられていたからで、もし連日、同じ文章を「なりわい」として書きつづけなければならぬとしたら、一ヵ月で私は降参するに相違ない。

ヒトという生き物には、くり返しの連鎖を断ち切って、輪の外へ飛び出したいと願う潜在的な欲望がある。だからその欲望をねじ伏せて、三十年間ブランデーを注ぎつづける男や、四十年間、天ぶらを揚げつづけるおやじさんに、畏敬のまなざしをそそぎたくなるのだ。

でも一方、ヒトは自分だけ輪の外へ飛び出すのを、本能的に恐怖し、ためらう。みんなで渡ればこわくない赤信号も、一人で無視する勇氣は持てない。だから社会のルールや世間の掟おきてを苦もなく破ったり、自分で自分の額に余され者、はみだし者のレッテルを貼って平然としている人間を見ると、これまた、畏敬の念を禁じえないのである。「えらいやつちゃ」と、なぜか大阪弁が出てくる。「とても、かなンワ」とも思う。

*

私がこの本で紹介するのは、奇人変人のお話だが、原本には伴蒿蹊ばんこうけいが編述した『近世畸人伝』と、八島五岳のあらわした『百家琦行伝』を主に使っている。

蒿蹊は江戸時代中期の国学者。五岳はそれより少しあとに、江戸で戯作を業とした人だ

った。

「奇」といい「畸」といい「琦」といっても、意味はほぼ同じで「珍しい」「すぐれている」「ふうがわり」といった場合に、これらの文字を当てる。やはりその裏には、はみだし人間への、そこはかとない愛情と、羨望せんぼうの思いが読み取れるのである。

歴史の流れをさかのぼって行くと、時代が古くなるにつれて、アウトローの影は消える。たとえば飛鳥・奈良朝あたり、大づかみに分けると、「収奪する側」と「される側」の二極しかない単純社会だから、そのどちらにも組み込まれない「世の中の余され者」など、存在しえないし、出現もしにくい。

わずかに万葉歌人の山上憶良おくらが、「貧窮問答歌」の中で、ささやかな政治批判をこころみているけれど、この程度ではレジスタンスとも奇行ともいえない気がする。

*

しかし、平安朝までくぐると、さすがにやや、社会機構にゆるみが生まれ、細分化も進んで、僧とも俗ともつかぬ道心者、隠者、さすらいの歌詠みなど、はみだし人間の原型があらわれてくる。

税の重さにあえぎ、凶作に苦しんで、村を捨てた農民が、追いつめられたあげく拐かどわかしや

売春、盗みなど、よからぬ群れに落ちてゆくのも、ドロップアウトの一種かもしれない。

でも、いわゆる余され者が、全国的な規模で、どツとばかり集団発生するのは、源平争乱のあと——中世に入ってからである。

彼ら「日本的是みだし人間」の系譜が、どのような形をとりながら江戸時代に伝わり、現代にまで及んでいるか。いずれ、ゆっくり見ていくことにして、とりあえず今日は、江戸版シブチン・オトーサンに登場してもらおう。

*

名はわからない。『百家琦行伝』には「芝山某^{なにがし}」とあるだけだが、どうやらこの人、加賀邸の郭内に住む小禄の藩士だったらしい。

日ごろから武具のたぐいにはお金をかけているけれど、食事や家や着るものなどは質素をきわめ、家族にもけっして贅沢^{ぜいたく}を許さない。一匹、飼っている馬にまで、原っぱで草を食べさせ、飼葉^{かいば}の節約を励行させるシブチンである。

妻や下僕だと値切り方が下手なので、日用品の買い物にも芝山みずから馬に乗って出かける。そして大根の束やら味噌の包みやら乾鮭^{からぎけ}やら、求めた品々を鞍^{くら}の両脇にぶらさげて帰る。二本差した武士にはあるまじき光景なので、往来の者はクスクス笑う。芝山某は意

に介さない。

彼の家の門は、粗末な板屋根を乗せた冠木門で、片方は柱に、片方は榎えのきに打ちつけてあったから、木が成長するにつれて屋根は少しずつかたむき、とうとう門かど、ぜんたいが曲がってしまった。妻子らは当然、ぶつくさ言い出す。

「みっともないわパパ。このさい思い切って家も門も、すっかり建て替えましょうよ」
どなりつけると思いのほか、芝山は承知し、貯えの小判を持ち出してきて、まず設計図を描いた。そしてその上に、

「ええと、玄関に五両、居間と客間に十五両、台所に三両、湯殿に二両……」
つぶやきながら小判を置き並べ、しばらくじっと眺めたあと、いきなり、

「大変だッ、火事だ火事だッ」

さけびざま小判を設計図に押し包み、ふところに捻ねじ込んで、寝間へ走った。ふとんを引つかぶって寝てしまったのである。

芝山家の家族らは、オートサンの心根こころねのいじらしさに打たれ、新築計画を撤回したと『琦行伝』にはあるけれど、さて、今の女房族はこれくらいちの奇策で、マイホームの夢をあきらめるだろうか。泰平のまっただ中、治ちにいて乱を忘れず、生活を切りつめてまで武器をととのえるのは、当時といえども奇行だが、人々はその奇行の中に、芝山某の節操を

見た。侍としての志こころざしを看取した。奇は、したがって美にも通じたのだ。でも、家庭第一主義の現代では、彼は奇人にすらあたい価すまい。愚人とあざけられるのがオチだろう。

桃ぐるい縞ぐるい

「人間には、毎日のくり返しをたち切って、自分をしばる鎖の外へ飛び出してしまいたいと願う潜在的な欲望がある」

そう前に、私は書いた。つまり言えば奇人願望だが、そのくせ人間は、

「自分だけ一人で、輪の外へ出て行く勇気がなかなか持てない」

とも書いた。社会の掟おきてやルールを無視し、平然とドロップアウトしてのける人を、「えらいやっちゃ」と褒めもしたけれど、もしかしたらこの手の奇人は、勇者であると同時に、嗜虐しぎやくの快感をひそかに楽しむマゾ資質の持ち主かもしれない。

*

外山成山とやませいざんと称する人物がいた。武士なのか学者なのか、もしくは何か他の職業についていた人か、『百家琦行伝』には一行も記述されていない。ただ、丹後の国の産で、三十歳